豊島区立 16.5.25 郷土資料館

ZOSHIGAYA MISSIONRY MUSEUM

雑司が谷旧宣教師館だより

第３１号
2004年３月１日発行

豊島区立雑司が谷旧宣教師館
〒171－0032 東京都豊島区雑司が谷 1－25－5Tel/Fax (03) 3985－4081

『赤い鳥』発祥の地

今から85年前の大正７（1918）年７月、鈴木三重吉は北豊島郡高田村大字巣鴨字代地3559（現在の目白３丁目17）の自宅で、子どものための文芸雑誌、『赤い鳥』を創刊しました。

三重吉はそれまでの教訓主義的なおとぎ話ではなく、「子どもたちに芸術として真価のある純麗な童話と童謡を創作する運動を起こしたい」と、森林太郎、泉鏡花、高浜虚子、徳田秋声、島崎藤村、北原白秋、小川未明、小宮豊隆、野上臼川、野上弥生子など、当時の文壇の主要な作家の賛同を得て童話・童謡の新時代を築きました。

昭和11年６月に終刊するまで全巻196冊が刊行され、『赤い鳥』に童話を発表した作家の数は三百人に及びます。その中から芥川龍之介の「蜘蛛の糸」（大正７年創刊号）、有島武郎の「一房の葡萄」（大正９年８月）、新美南吉の「ごん狐」（昭和７年１月）など優れた童話が生まれました。

『赤い鳥』に掲載された童話は、純創作と翻訳および伝説の再創造があります。なかも小川未明は、41編もの純創作童話を寄稿しています。未明の童話の特徴を坪田譲治は次のように書いています。

「童話というものは、その美しさに本領があるのです。これをどう説明したら言いのでしょうか。そして未明の童話の本領、本質もその美しさにあるので、どうしても、それを解釈して見ずにおけません。

愛情を以って見れば、凡てのもの、みなそれぞれに美しいのではないでしょうか。人間も自然も、人間の醜いところも、自然の平凡なところも、それからまた人生の悲しいことも、不幸なことも、凡て愛情によって清められ、美しさとなって表現されてくるのではないでしょうか。と言って、人間の罪悪を美しく描き出すというのではありません。罪と悪と醜とを背景として、善と正と美を一層輝いたものにするという訳であります。悪と闘ってこそ、たとえ破れたとしても、正義の美しさがあるのです。いや、そのような場合、人間は破れても、正義は破れずということになり、正義の光をいやます次第であります。

この児童に対する愛、人間と自然に対する愛情。人生と正義に対するそれ、それが非常な高熱で燃え盛る時が、小川先生の創作に対する情熱、感激ということになると思われます。そしてそれがこの世のものとも思われないほど美しい幻想となり、また夢のようなお話ともなって、描き出されるのです。」
（『小川未明童話集』解説（新潮文庫）より）

『赤い鳥』が世に送り出した数多い児童文学作家のなかでも、坪田譲治の文学的出発は未明との出会いで始まったと言われています。大正５年、坪田譲治は高田村狐塚（現・西池袋二丁目）に新居を構えます。（のちに坪田譲治は、ここで自らの蔵書を開放して「びわのみ文庫」を開きます。）

いっぽう未明は大正11年、「赤い鳥社」

に程近い雑司ヶ谷上り屋敷（現・西池袋二丁目）に移り住み、のちに日本女子大裏通りに面した小石川雑司ヶ谷に引越し、「今後を童話に専心する」という童話宣言を行います。

大正時代から昭和にかけて、児童文学関係の先駆者たちが目白・雑司ヶ谷地域に多く住み創作活動を行いました。『赤い鳥』の挿し絵を多く描いた深澤省三も大正 11 年暮れ、妻・紅子と目白狐塚（現・西池袋二丁目）に引っ越ししてきています。

北原白秋の作詞した、「赤い鳥小鳥」「りすりす小栗鼠」、西条八十の「かなりや」などは愛唱歌として歌い継がれ、童謡においても、『赤い鳥』の果たした役割は大きいものがあります。
デザインの斬新さなど格別のものがあります　本館一階の児童図書コーナーには、『赤い鳥』および『金の船』『金の星』の復刻版が設置されています。お手にとり、ページをめくって見てください。挿し絵の美しさ、。

また『赤い鳥』を、広告という視点でご覧になられることもお薦めします。広告には時代の空気が色濃く反映されています。1918 年の創刊から廃刊される 1936 年までの約 20 年間に及ぶ広告の変遷も興味深いものがあります。ご感想をお寄せください。本紙でご紹介してまいります。

［参考文献］
『「赤い鳥」復刻版　解説・執筆者索引』
（日本近代文学館　1979 年）
『こどもの再発見一豊島の児童文化運動と新学校』（豊島区立郷土資料館 1991 年）

寄稿コーナー

毎月第1土曜日、小川未明の作品と『赤い鳥』掲載の童話を読み聞かせる、「おばあちゃんのおはなし会」（注＊）に参加してくださる中川啓子さん。2月の会の終わりに、100年前の未明の恋物語をお話してくれました。まるでその目で見ていたかのように。その訳は、なんと未明のお嬢さん、岡上鈴江さんから直接伺っていたのです。とってもいいお話なので、「たより」でご紹介したいとお願いしたところ、早速、素晴らしい文章を寄せていただきました。

中川さんは中野区にお住いです。小川未明の次女で現在高円寺にお住いの岡上鈴江さんと親交があり、小川未明や未明と係りのあった文士についての聞き取りを行っています。

（注＊）「おばあちゃんのおはなし会」
毎月第一土曜日、午後２時～３時
雑司が谷旧宣教師館・児童コーナー
お話：小森香子さん（詩人）
費用：無料　申し込みなし
当日会場までお越しください。
年間予定（作品一覧）あります。

「初恋を貫いた未明」

中川　啓子

小川未明は早稲田大学英文科在学中にしばしば住まいを変えた。

下宿先でもおかみさんのぎすぎすした言葉や態度が気に障るといってはとびだし、食事に不満を感じては宿をかわり、また同宿人が女性を連れ込んで夜遅くまで喋ったりすると、癇にさわって怒鳴るといった調子で、僅か三日で引越ししたこともあるという。その三十何回目かの下宿先の牛込榎木町の大塚家で、山田キチと運命的に出会った。

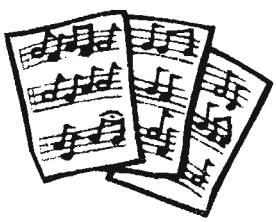
長岡（新潟県）で裕福に育てられたキチは当時創立したばかりの日本女子大付属高等女学校に通学するために上京して親戚にあたる大塚家に寄宿していた。一時は土木建築技師などして羽振りも良かったが、事業に失敗したあとらしく大きな住まいを学生たちに部屋を貸して暮らしていた。

ある日、大塚家が貼りだした『貸間あります』の札をみて未明が机に本箱、柳行李にふとん包みをもって入居してきた。

太っているわけではないが、がっしりと逞しく体格のいい未明は背筋のしゃんとした男で、田舎の母が送ってくる木綿絣の着

物に袴姿の似合う好青年だった。頭が重いといっては髪が伸びるのを嫌って三分刈りにしていた。いつも風呂あがりのような丸い坊主頭は清潔感があって、丸い眼鏡の奥に優しい目があった。明治 38(1905)年、キチが女学校四年のことである。

キチには何かと面倒をみてくれる日本女子大に通う叔母も大塚家に同居していた。女子大も女学校も同じ敷地内にあるので、ハイカラな叔母のあとについて学校に通うキチ。毎朝、玄関を出ると山吹町を通りぬけて江戸川橋のところに出て、そこから目白坂を上って校門をくぐる。叔母とキチはいつも一緒だった。



日曜日にはバイブルをかかえて教会にいき、外人たちともたくみに言葉を交わしている姉妹のように仲がいい女性たちが、末明とおなじように原書をひもとき、美しい発音で英詩を読む。イギリスの浪漫派の詩人たちの作品に心を惹かれていた末明は目を見張った。絹のリボンに衣擦れの音をたてる晴れやかな振袖に胸高にはいた袴。廊下ですれ違うだけで、洗練された都会の香りがした。

朝夕、顔をあわせるようになって、最初に口をきいたのは叔母だった。

「小川さんの英語の発音はごついわ。
それじゃ、まるでドイツ語みたい」
とからかうようにいった。

よく英詩を吟じているのが、ふすまごしに聞こえるのだろう。なんとなく生意気だと思っていた末明は、むっとして言葉をかえした。それがきっかけだった。生真面目な末明には社交性はなかったが、力強い笑い声と機知に富んだユーモアのセンスの末明はカリスマ性があって人をひきつける何かがあった。

「小川さん。また英文法を無視して」

英詩を読むときも気分からはいって大きくうなずきながら感激して吟じている末明の訳がおかしいと叔母がいうと、末明は反論する、こと英語に関しては叔母の実力がまさっていたのかもしれない。ゲームのように原書をはさんでよく言い争っていた。

末明が強く惹かれたのはその女子大生でなく、知性的な叔母のわきにいて二人の話を大きな瞳をくりくり動かして聞いていたキチである。

誠実なもの言いの末明と、口達者な叔母の真剣すぎる論争に、おかしさをこらえきれずキチがくすっと笑うと、肩のあたりまである豊かな髪を結わえた大きなリボンが揺れる。えくぼが可愛いいふくよかな頬と聡明そうな瞳は、末明をひきつけた。

末明がじっと見つめると、たっぷりした長いまつげがためらうように伏せしばらく瞬いていた。次の瞬間に黒い瞳から強い光が放たれたように思えた。この世には、一目ぼれの愛が実現することを信じない人たちがいるかもしれないが、ロマンチストな末明はこのとき心の奥底まで見つめられて、一生続く、永遠に続く深い愛をかんじたのだろう。当時の慣例にならって、末明は大塚家の主人にキチの両親へ結婚の仲介をしてくれるよう申し入れた。

ところが、主人は即座に、

「あんたはまだ学生だし、キチもまだ女学校にいっている子どもだから、そんな話にのれない」

といって、すげなく断った。

武者小路実篤の小説「お目出たき人」(明治 44 年)を例にとってみると、川路氏を介してのプロポーズもあっけなく断られるのだが、この「鶴」という女性を見かけただけで、おつきあいどころか口もきいていない。その間、数年という歳月をもんもんと思いつめるという小説もあるように、まだ、明治の頃、こう答えるのが世間一般の通念だったろう。

末明の場合はまだ一目惚れの段階だったと思われるが、若い男女が好きあって交際したり、恋愛結婚することに世間はまだまだ否定的だったのだろう。

「今すぐ結婚するというのではない。来春、学校をでてからのことだが」と、末明は頼んだが、答は同じだった。

気が短い末明はかんかんに怒って、ただちに大塚家をとびだし、近くの家に引越してしまう。しかし、下宿を変わっても気分は晴れず、大学に出ても落ち着かず、顔色も冴えなかった。
「何かあったのか、どうしたのか」
と、心配して級友たちが声をかけた。
末明が、ことの次第を打ち明けると、
「大塚氏の態度はゆき過ぎだ」
「実の父親でもない者が、君の求婚を相手の両親に伝えもせず断るとは生意気だ。そんな権利はない。われわれがいって、かけあってやる」
西村酔夢、吉江喬松、高須梅渓などというのちに文名をあげた級友たちが、悲しみに沈んでいる末明のために、大塚家にのりこんで談判をしたが、前よりもさらに主人の態度を硬化させてしまった。
末明の潔癖なまでの純粋な態度が、級友を動かしたのだろう。彼らはキチのところまでいき、
「小川は正直でいい人間です。
今にきっとえらくなると、ぼくたちは信じているんです、どうかよろしく頼みます」
と、頭をさげたという。
そうこうしているうちに、末明に田舎から母の実家の縁つづきの娘と結婚するようにいってきた。末明は、その話を一顧だにせず、即座に断ったという。遠く離れて暮らしていても、父には末明の気持がわかったのだろう。自分たちが持ち込んだ縁談を強要せず、息子には好きな相手がいるに違いないと察して、キチの存在をしる。

末明の父、澄晴は上杉謙信を崇拝するあまり春日山城址に神社創設を決意して資金集めに奔走。明治 27 年2月神社創設が認可されて、春日山神社を創設して、その宮司となった一途な男だった。
結婚を申し込むのに他人を介するのが常識だった時代に、世間体など憚らずキチの実家のある長岡に出向く。駅前の旅館で身なりを整え、新しい人力車をやとって、士の階級意識を捨て、一面識もないキチの実家である商家に単身のりこんで、ただひたすら息子の幸せを願って申しこんだ。
明治 38 年3月『新小説』に発表した『霰に霙（あられにみぞれ）』で作家的地位を確立した末明は7月に早稲田大学を卒業。翌39年5月に24歳の末明は18歳の山田キチと、末明の実家である春日山神社で結婚した。

あの離婚率の高いアメリカでさえも、一目ぼれの相手と結婚した場合、女性はたった6．9％しか離婚していない。ともかく、一目ぼれの相手と結婚した場合、その結婚はアメリカの平均よりかなり長続きしているという統計結果がでている。どうやら一目ぼれは、ゆっくり恋に落ちるよりも深く、強い絆を作るものらしい。恋に落ちたときの強烈な体験がふたりのあいだの結びつきに重要な影響を与えるのだろうか。また、一目ぼれをして結婚したカップルはコミュニケーションも信頼度もハイレベルなのかもしれない。この二つは結婚生活では、かなり重要な要素だと思われる。

小説と童話の二本立てでかなりの流行作家だった末明が後年、童話作家一本になったのは、文士は女遊びをするとか、外に女を囲うとか、そういったことが当然といった風潮に嫌気がさしたともきく。
終の棲家である高円寺に落ち着くまで、若松町から早稲田南町、矢来町、雑司が谷などと母校早稲田にほど近いところでよく住居もかえた。『あきっぽい末明氏は机、テーブル、植木などつぎつぎに買うけれど、飽きるとすぐ替えてしまう。しかし夫人だけは絶対にかえない』と文芸雑誌のゴシップ欄に載ったとおりである。

潔癖で純粋な愛を信じる童話作家、末明は 79 歳で死去。
あとを追うように二年後にキチ死去。

[編集後記]　丹念な聞き取りを基に末明の恋を執筆してくださった中川さん、ありがとうございます。作家末明が近しい人に思えます。ゴシップが 100 年前から健在とは驚きました。浜地